

ふ り が な 氏 名	おおもと ひろき 大本 博樹
学 位 の 種 類	博士（歯学）
学 位 記 番 号	甲 第 851 号
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 8 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項に該当
学 位 論 文 題 目	A study about stress undergoing dental treatment in patients with gagging reflex (異常絞扼反射患者の歯科治療時におけるストレスに関する検 討)
学位論文掲載誌	Journal of Osaka Dental University 第 53 巻 第 1 号 平成 31 年 4 月
論 文 調 査 委 員	主 査 中嶋 正博 教授 副 査 岡崎 定司 教授 副 査 有田 憲司 教授

## 論文内容要旨

歯科治療時の異常絞扼反射 (GR) は、不安やストレス、過去の経験や疼痛刺激などの心理的因子が原因の一つとして考えられ、歯科治療を妨げる。また歯科治療からの逃避行動だけではなく、セルフ口腔ケアをも避けることになり、口腔内環境を悪化させる。そのため、GR 患者に歯科治療を行う場合、しばしば薬物的行動調整が適応される。これまで、不安やストレスと GR の関連について報告が見られるが、GR 患者に歯科治療が与える不安やストレスの変化について報告されたものは見られない。そこで、GR 患者の歯科治療に静脈内鎮静法を適応した患者の歯科治療時の不安やストレスの変化について検討した。

大阪歯科大学附属病院障がい者歯科を受診し、GR 重症度分類 (CGP) G3 以上の GR と診断され、歯科治療時に静脈内鎮静法を適応した患者 15 名を対象とした。初診時に Y-G 性格検査® (Y-G) を、治療前後に新版 STAI® (STAI) で不安度測定を行った。またストレス評価として治療毎に治療前・中・後の唾液アミラーゼ活性値を唾液アミラーゼモニター® (ニプロ社製) を用いて、また CORTISOL ENZYME IMMUNOASSAY KIT を用いて唾液コルチゾールを測定した。Y-G において類型判定では D 型が最も多かった。STAI の結果では STAI 特性不安は治療前後で変化はなかったが、STAI 状態不安は、治療後は治療前と比べ有意に低下していた。唾液アミラーゼは治療中は治療前に比べ有意に低下し、治療後は治療中に対して有意に上昇していた。唾液コルチゾール流涎法は、治療後は治療前に対して有意に低下していた。スワブ法では治療後は治療前および治療中に対して有意に低下していた。また、それぞれ治療回数毎の測定値には変化は認められなかった。

Y-G では、GR 患者の特徴は見出せなかった。STAI 不安度検査の状態不安において、治療後が治療前よ

り有意に低下していたことは治療終了に対する安堵感で低下しているものと思われ、GR 患者ではこれから行われる歯科治療に対して不安を持っているということが判った。唾液アミラーゼは治療前に比べ、治療中は有意に低下し、治療中のストレスは抑制されていると思われた。また、唾液コルチゾールも治療後で治療前に比べ有意に低下しており、歯科治療中のストレスは抑制されていると思われた。しかしながら、治療毎では治療前の測定値には変化が認められず、治療回数を重ねても不安やストレスの変化には影響しなかった。以上のことから、静脈内鎮静法下での歯科治療は、治療中の不安やストレスの軽減には有用であるが、歯科治療自体の不安やストレスは軽減されていないと考えられた。そこで、GR 患者に継続したセルフ口腔ケアを含めた口腔管理を行うためには、不安階層表などを応用した認知行動療法を積極的に行う必要があると思われた。(大阪歯科大学医の倫理委員会承認 大歯医倫第 110858 号)

### 論文審査結果要旨

GR 患者の歯科治療に静脈内鎮静法を適応した患者の歯科治療時の不安やストレスの変化について検討したものである。Y-G 性格検査からは、GR 患者の性格に特徴は見出せなかった。STAI 不安度測定状態不安が、治療前後で有意に下がっていることから、歯科治療に対する不安を持っていることが分かった。また唾液ストレスホルモン測定の結果から静脈内鎮静法での歯科治療中のストレスは抑制されていることが分かった。しかし、治療毎では治療前の測定値に変化が認められないことから、治療回数を重ねても不安やストレスの変化には影響しないということが分かった。これらから静脈内鎮静法下での歯科治療は、治療中の不安やストレスの抑制には有用だが、歯科治療自体の不安やストレスは抑制されていないと考えられた。

以上、GR 患者において静脈内鎮静法での歯科治療は、治療中の不安やストレスの抑制には有用であるが、治療を重ねても、歯科治療自体の不安やストレスの抑制には有用ではないことが証明された点において、本論文は博士（歯学）の学位を授与するに値すると判定した。